

北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association

<北海道熊研究会 会報> 第 104 号 2021 年 7 月 24 日

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

ご意見ご連絡は本紙送信 email ではなく、下記の email へお願い致します

e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

既報会報の 1~103 号は Website に「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい

「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

寄稿者 北海道の熊問題を考える会；

共同代表 稗田 一俊 氏

題名 北海道のヒグマ管理計画は道民の生命・財産を

守る計画ではない。道の計画はどう見ても

学術調査を目的としており、見直しが必要だ。

なお、本稿は北海道議会議員：丸岩 浩二氏が 7 月 13 日に、主催された北海道環境生活部 自然環境担当局長 高橋 奉巳氏と、自然環境課課長補佐（野生鳥獣）の武田忠義との道のヒグマ対策についての意見交換会での資料の一部である。

(1) さて、札幌市西区や旭川市でヒグマの出没が報じられております。

旭川市の個体は、石狩川の河川敷・中州などで目撃されており、門崎さんは「このヒグマはこのエリアを自分の生活圏にしている可能性があるのでは」と指摘されてい

ます。このヒグマがこの場所に居座る前に、ヒグマの行動範囲を精査して、早急に電気柵の設置をすることで、この場所から追い払うことが必要だと思います。

放置していれば、東区や南区などの事例のように、捕殺しか方法がなくなりますので、今後のヒグマ出没抑止対策への一つのステップとして、上記のような出没抑止対策を取るように、北海道に申し入れることはできないでしょうか。

(2) 北海道のヒグマ対策が30年以上も前から、ヒグマ出没抑止対策に徹していれば、多くの知見を得られて、迅速に行動の把握を行い、出没経路を電気柵で封鎖して、人里へ近づかないように追い払うような体制が構築されたのではないかと考えてなりません。

(3) 先日のお話しでは、出没経路を特定する調査や出没経路を電気柵で封鎖するような抑止政策は北海道としては念頭になかったように私は受け止めました。30年以上を経過してもなお、いまだにヒグマの徘徊が抑止出来ないでいるのは、どう考えても理解できないことです。つまりは、ヒグマ保護管理計画やヒグマ対策は、人里へ出没したヒグマを出没しないように抑止する研究ではなく、ヒグマの学術的な調査・研究ばかりをしてきたからではないかと、考えております。

(4) 人里へ誘引しないように放置された果樹の伐採などしていますが、それよりも、今、目の前で発生しているヒグマの出没（徘徊）を抑止する調査・研究こそが、ヒグマとの共存共栄に繋がることだと思います。

(5) なお、地域個体群の保護という目的がありながら、出没を放置したがために、この出没ヒグマを捕獲する目的で檻罠を設置するわけですが、ターゲットとは異なるヒグマまで捕獲して猟銃で銃殺しているのです。つまり、出没情報を得た時点で出没経路を調査して、電気柵で出没経路を封鎖するなどの抑止対策をしてこなかったがために、無関係のヒグマまでが道連れにされて殺されているのですから、必要以上のヒグマを殺す結果になっていますので、このことは、地域個体群の保護策に反しています。

(6) こうした矛盾あるヒグマ保護管理計画、ヒグマ対策を根本から見直す必要があると思っておりますので、先日の申し入れに至ったわけです。

(7) 人里へのヒグマの出没を抑止する対策を繰り返すことが必要だと思いますので、出没情報がありながら出没を抑止しなかった過去の南区の事例、野幌の事例などなど、精査されて、北海道のヒグマ対策の意識を変えていただきたいと思いますので、よろ

しくお願いします。

(8) また、山林でのヒグマ被害は情報提供の充実や、ヒグマがいる場所へ入城する場合の心構えについてのレクチャーなり、情報提供が不足している結果だと思えます。

ヒグマの生態については解説しているが、ヒグマに出会った時の対処は外国の文献に頼っているところがありますし、解説に当たる担当者（専門家？科学者？大学教授？）は、真摯に、これまでの調査研究のあり方を反省し、自分で汗をかいて、ヒグマの観察に努めるべきだと思います。コンピューターの進歩や IT・AI 技術など調査機器・分析機器は素晴らしいものが生み出されたとしても、ヒグマを見る目がなければ数字が表示されるだけのことです。

(9) その事例が東区のヒグマを見ればお分かりいただけると思えます。

つまり、ヒグマの気持ちを全く考えずに追い回した結果、ヒグマをパニックに陥らせて、人的な被害発生に繋がったのは間違いないと思えます。その際、北海道のヒグマ専門家・研究者の指導はなかったとのことですから…。「窮鼠猫を噛む」ということわざは、科学のない時代に観察に基づいた経験から気がついた智慧です。その智慧さえも東区には行かされておられません。数字で表せないことだから、科学者は扱わないのです。つまり、定量化できないことは扱わない、無視するというのが、現代の科学なのです。

(10) 動物に対する基礎が出来ていない背景で策定された北海道ヒグマ保護管理計画やヒグマ対策が全く機能していないのはそのためだと断言できます。

(11) 今、現に発生している札幌市西区、旭川市のヒグマ出没騒ぎを見ていけば、北海道の調査・研究のレベルが見えてくると思えます。

(12) 担当者を批判するのではなくて、本当の調査・研究をしていただきたいと願っております。

(13) ぜひ、よりよい方向へ舵を切るようによろしく願いいたします。

①「URL : <http://protectingecology.org/report/11093> 」今回の意見交換会以前に道から寄せられた回答などを掲載しています。

(了)